# BATTLE BALLER HARUKA

# Ⅱ－2

知恵比べ

Ψ

(Eternity Flame)

# バトルボーラーはるか

## 第二集
## 星間戦争

## 第二章
## 知恵比べ

作・Ψ　**(Eternity Flame)**

「…ッとに昨日は不快な一日だったよな。」
一夜明け。徳島の帰路に着いていた車中でも、正友(まさとも)は夕べの出来事に対する不快感を引きずっていて、皆に聞こえるように不満を漏らしている。自らの気持ちを落ちつかせようとしているのだろうが―
「もう、さっきから何回そのコト言ってるのよ。こっちまで気持ちが落ちこむからヤメてよ！」
正友の感情に同調するどころか、バッサリとそう切り捨てるはるか。秀樹(ひでき)と沙織(さおり)もはるかと同じ気持ちなのか、ダンマリを決めこんでいる。
「おまっ、その言い方はないんじゃね？」
「だってアンタ、しつこいじゃない。」
「んなコト言ったって、昨日の今日だぜ。お前、腹立ってねぇのかよ？得体の知れない奴らにコケにされてよぉ。お前、ひょっとしてマゾなん？」
「私はアンタに腹が立つわ。」
「何だってッ!?」
「同じコト何回もうるさいのよアンタッ。これ以上しつこく言うと、ひっぱたくわよッ！！」
「っんだとッ、コラッ！！」
得体の知れない存在にコケにされたのが腹立だしいのではなく、未知の存在に対する不安感などが、用心深い正友の情緒(じょうちょ)を不安定にさせていて。秀樹にはそれがよく分かっていたので、黙っていたのだが、ヒートアップする二人の口論を見て、さすがに止めに入った。
「二人とも内輪(うちわ)揉(も)めはヤメろ。俺にも昨日の事はよく分からんが、師匠なら何か知ってるかも知れん。ケンカをヤメないと気が散ってオレの運転が…」
「キャッ！」
「ぬぉあッ！」
高速道路の端から端まで、秀樹がハンドルを振り、車を横スベリさせた。予想外のアクシデントに、驚くはるかと正友。

「わ、分かったよ秀さん。分かったから無茶しないでくれよッ！」
「お兄ちゃん、無茶はヤメて！」
「そっか…」
「ふぅ～…」
「はぁ～…。アンタのせいよッ…」
溜め息をついた後に、はるかが小声でそう正友に文句を言うと―
「ん、何か言ったか？」
秀樹がその小声に反応し―
「えっ！？何でもないわ…」
慌ててはるかは言葉を打ち消した。
「そっか…。」
これ以上、無茶な運転をされてはたまった物ではない。大好きな秀樹に怒られてしまうきっかけを作った正友に、はるかは苛立っていたものの。口を噤(つつし)まざるを得なかった。沙織は眠っていて事態を知らない。
横目でチラッと正友を見ると、つい今さっきまで口喧嘩をしてたのに、窓の外を眺めようとする姿勢のまま、もう寝てしまっている。夕べがあまり眠れなかったとは言え、その気ままで呑気(のんき)な性格に、はるかの苛立(いらだ)ちは余計に募るばかりであったが、不完全燃焼した心がショートして、いつしか彼女自身も睡魔の誘惑(ゆうわく)に陥り眠りこけていた。
「皆、着いたぞ。」
秀樹の号令に三人は一度に目覚めた。
「ホホホ。いい骨休めになったかの？」
『粉の実、』に到着したはるか達を鮎吉(でんきち)が出迎えた。
「おじいちゃん、ただいま。」
「おかえり、はるか。楽しかったかのぉ？」
「師匠、お話が。」
「何じゃ？」

強行軍より帰って来たばかりにも関らず、秀樹が鮎吉と話しこみ出した。聞き耳を立てながら茶を入れるはるかと沙織。正友も一緒になって、秀樹と鮎吉に昨日のいきさつを話すと…

「ついに動き出したか…」

鮎吉は深刻そうにそう答えた。

「師匠はヤツらをご存知なんですか？」

「うむ。八野とか言う正友の兄弟子は勿論(もちろん)、八野達を操る“神”の存在もな。」

「えっ！？…“神”とは何なんですか？」

「八大心拳の使い手…それは人間ばかりとは限らぬ。その“神”という者の正体は、パーピリオン[ダークマター]心拳の使い手、パーピリオン星人じゃ。」

「パーピリオン星人！？…どんな宇宙人なのですか？」

「お主がパーピリオン星人について、不思議がるのも無理はないじゃろうて…自らを“神”などと自負する者の気持ちなんぞ理解できないじゃろからのォ。」

「えぇ。ヤツらの目的は何かあるんでしょうか？」

「ある。それは、今、正友の話の中にあった通りじゃ。」

「正友の話…紛争や国家の興亡(こうぼう)を、戦略ゲームでもやって遊ぶかのように巻き起こしたりして、世界を牛耳(ぎゅうじ)ってるコトですか？」

「それとは違う…好敵手の事じゃ。」

「好敵手…？」

「“神”とも名乗る存在なら、ほとんどの欲望は満たす事は可能と考えるのが妥当(だとう)じゃろう。ただ、そんな存在も、その存在を脅(おびや)かす事はできぬじゃろ？」

「と、言いますと？…」

「簡単に言うとじゃな。究極の存在を破壊する者じゃ。もっと言えば、それは闘争本能を満たす存在。こればっかりは幾ら全知全能に近づいたとしても、自分だけではどうしようもないじゃろ？」

「なるほど！それで今までの話が繋がりますね。」

鮎吉が秀樹に言いたかったのは、どんな欲望も自分自身で満たせる個体が仮にいたとしても、戦いのスリルだけは、相手がいない事には満たせないという事であった。

人類歴史が犯罪や戦争の歴史であるのも、パーピリオン星人がそこに裏で糸を引いているとするなら、言わばそれは代理戦争であり。その仮定を八野達の言動に当てはめるなら、パーピリオン星人という“神”のような存在が、個人レベルで自分とタメを張れる存在を八野達を使って選別させ、自らが戦いのスリルを味わおうとしているという解釈(かいしゃく)で、つじつまが合う。イチ早くそれを察した秀樹であったが、他の者達はもう一つ理解しきれていないようであったので、秀樹が掻(か)い摘(つま)んで説明するのに時間を要してしまっていた。

「差しずめ今夜辺りにも、パーピリオン星人の尖兵(せんぺい)とやらは攻めてきそうじやのォ。」

「なら、あべこべに待ち受けて返り討ちにしましょう。」

「そうじゃな。」

「ところで師匠。師匠はそのパーピリオン星人を、何故ご存知なのですか？」

「伝え聞く先代からの戦いの記録があってのォ…何度となく、彼奴らとご先祖様達は戦(や)り合っておるのじゃ。」

「…そうなんですか。ヤツらは相当に高度な科学技術を持っているようですが、他に能力的な特徴などは、どうなんでしょうかね。」

「そこら辺はワシも知らぬ。じゃが、彼奴等と戦うなら宇宙での戦闘も視野に入れておかねばのう。」

「宇宙…ですか？」

「うむ。お主らには話しておらんかったが、対宇宙戦用のスピリットアームズ[神統武具]が、とある場所に保管されておる。今夜の一件が一段落したら、扱い方を教えよう。」

「分かりました。」

その夜―
「はいッ。今、私がおります場所は徳島ですヨー。え～昨晩の失敗にも懲(こ)りずに、今度は現役女子高生のお宅に追撃取材をやって参りたいと思います。」
ビデオ片手に、昨晩はるか達の部屋に侵入しようとした男が、再び現れていた。
「おい、ちょっと待て！」
暗がりから、男に静止を促(うなが)す何者かの声が聞こえた。
「ギクッ！？…昨日に引き続き、またまた私、誰かに呼び止められてしまいましたぁ～。」
カメラ目線で小声にそう話す男。
「オイ、そこのデカイの。お前に言ってんだよ！聞いてんのか？」
そう言って、暗がりから姿を見せたのは正友であった。
「ハイ、どちら様でしょうか？」
薄暗い路地。ゆっくりと振り向いた男の顔を、はっきりと確認した正友。少し手間取ったが、見定めた直後に正友が驚きの声を上げた。
「あれッ！？お前、広介じゃんか！」
「ハイ、どうも広介でーす。」
「随分(ずいぶん)とご無沙汰(ぶさた)なのに、軽い挨拶だなぁ…。お前か？はるか達を尾け狙ってんのは。」
「ハイ、今から突撃レポートに参りたいのですが…」
「その喋り方、どうにかなんねーの？…まぁいいや。お前、オレを襲ったヤツらの仲間か？」
「あの～…そろそろ突撃レポートに移りたいのですが～…」
「ハァ～ッ！？お前、ナメてんのか？」
正友の知る広介とは全く別人格の人間となっていて、それが正友を苛つかせている。
「久しぶりの再会がこんな形になるなんて残念だな…。」
正友はそう言って、少し寂しそうな表情を浮かべた。
「…そろそろ女子高生の部屋に突入したいと思います。」
「テメェ、聞いてんのかッ！！」

自分を忘れてしまったかのように無視する広介。不自然さよりも、無視されている事に関しての怒りが、正友の心を報復へと導く。一気に間合いを詰めると、暗闇に紛れた死角から、強烈な上段への蹴りが放たれた。

「痛ッ！？な、なんだコイツ…。」

首元を横殴りした筈の蹴りであったが、正友の足が逆に悲鳴を上げていた。

「痛ぇ～ッ…お前、ホントに人間か？」

「フフフ。この者に何を聞いても無駄ですよ。」

「お前はッ！？八野かッ。」

「ご名答。」

「貴様、広介に何をした？」

「フッ。そんな事より、ご自分の心配をしたらどうですか？」

「何ッ！？」

接近している正友と広介の間を引き裂くように、斧が高速で飛び込んできた。

「くッ!!」

完全に不意を突かれた正友。とっさに半歩下がり、素手で斧を受け止め直撃は免れたが、刃を挟みこんで防いだ指は、摩擦(まさつ)で皮が破れ、手の平には僅(わず)かではあるが刃が食い込んでいた。指と手の平、どちらも流血し、混ざり合って地に滴(したた)り落ちていた。

「う、うぅ～…」

「ほう～。今のを防ぎましたか…」

痛みに悶(もだ)える余り、頭を垂れたのかと思いきや、正友は相当に怒っていたようで。

「お前ら全員まとめて叩き潰すッ!!」

と、言って八野達を睨(にら)みつけたのだが…

「何ッ！？アンタは…！？」

八野と広介の援軍として現れた三人組の男の中の一人を見て、すぐさま正友は驚きの声を発していた。

「大(だい)ちゃんさんじゃないッスか！？」

この男もまた、正友の知己(ちき)であった。龍球拳法と並び称される門外不出(もんがいふしゅつ)の拳法、棘辰(きょくしん)拳法の時期総帥。それがこの“大ちゃんさん”と呼ばれる男の素性であり、本名は大介(だいすけ)。正友も一目置く拳法の達人であった。

「何でアンタほどの男がこんな奴らに…」
八野という男がどれ程の使い手かは定かでないが、大介ほどの達人が言いなりになっている事実は曲げようもなく、それが正友には信じられないでいた。
「我、敵味わう～。」
そう言って大介が襲いかかってきた。と同時に、八野の合図により、広介もその輪に加わってきた。この絶対的な危機に、正友は何故かニヤリと笑みをこぼし、膝を少し曲げた感じで、一歩右足を踏み出すと、片手にあった斧を両手で白刃取(しらはどり)りのようにして持ち、頭に被るようなポーズに持っていった。
「ジュワッチ！！」
ウルトラセブンの必殺技のように、縦回転を加えた斧を、大介に向かって投げつけた。
「うがぁーッ!!」
予期せぬ正友の行動に、虚(きょ)を突かれた大介は、一瞬、のけぞりそうになったが、ここで退いてはと思い直し、向かってくる斧を腕力で振り払わんと行動に移ろうとしたのだが。とっさの出来事に困惑(こんわく)した僅(わず)かの対応の遅れが、隙(すき)を作ってしまっていた。
「隙ありッ、うらぁーッ！！」
「うぐふぉあぁー…」
向かってくる斧への対処に気を取られ、その斧に微妙な横回転が加えられているのを見落としていた。斧は大介の間合いへ飛び込む寸前で急カーブしていき、ブレに視覚を乱された大介は、真っ向から突き進んできた正友の攻撃をカウンターで受けてしまっていた。
「そちらも隙ありですッ！」
正友の後ろがガラ空きなのを好機と、広介が飛びかかって行ったのだが…。
「バーカ。何でオレ様が、斧に回転をかけたのかわかんねーでやんの。」
「えっ？…う、うわーッ!!」
大介から逃げるように旋回(せんかい)した斧が、一周して正友の背後へ回りこんできた。

「はい、一丁あがり。」
「ゲフッ！？グフォアァーッ！！」
正友の背中に攻撃しようとして、踏み込んでいた体勢は側面を無防備にし、そこへカウンターとなり襲いかかる斧。やっとの思いで躱すのが精一杯といった感じで、振り向き様の正友の回し蹴りをモロに喰らってしまっていた。
「ほほぅ～。中々、お強いですね。」
「おい、八野とか言ったな。ひょっとしてお前はオレの兄弟子か？」
「それがどうか？」
「…やっぱな。大チャンさんや広介に何をした！」
「それは、我々を倒した後で教えて差し上げましょう。」
「その言葉、覚えとけよッ。」
正友は八野と交戦しようとしたが、大介と広介が復活して立ち上がろうとしていたので、踏み止まった。
「馬鹿な！？…確かにノシた筈なのに…。」
大介には一本拳(いっぽんけん)と言われる、急所を突く為に中指だけを突出(とっしゅつ)させた握り拳で、急所を狙い打ちにし、広介には渾身(こんしん)の蹴りを浴びせたにも関らず、二人が立ち上がったのを見て、正友は困惑を隠せないでいた。
「ヴジュルルー…!!」
広介と大介が猛獣の威嚇(いかく)にも似た唸(うな)り声を上げ、正友を睨(にら)みつけている。それはまるっきり何かに取り憑(つ)かれたような面持ちで、白目を剥(む)き、狂暴(きょうぼう)なオーラを漂わせている。
「おい、八野！これがお前達の言う、“ゲーハモテーヌ”って状態か？」
「ほう、どうしてその呼び名を…そうか！チャン･リンシャンが話したのですね。そうです。我らが“神”、パーピリオン様の偉大なる力で進化を遂げた超人。それが彼らです。」
「そしてお前の操り人形ってワケか？」
「何とでも言うがよい…進化したこの者達の力は、先程の比ではないですよ。覚悟めされよ。」

大介が地を蹴り、その瞬発力で猛ダッシュすると。蹴りあげた大地に大きな足跡が残り、それが並外れた筋力である事を物語っていた。広介もまた、大介と同じ域にまで筋力が増していて、ほぼ同時の狭撃(きょうげき)は熾烈(しれつ)を極めた。

正気を失っているとはいえ、体に染みついた技のキレ味は健在で、本能のままに眼前(がんぜん)の正友を討たんとする技の数々。そこに、神と言われる者から与えられた力が作用し、圧倒的パワーとスピードが増し加わり、正友を追い詰めようとしていた。

「しまったッ！？」

二人がかりでの激しい攻防に追い詰められた正友は、背後に回り込んだ広介に対処できず、羽交(はが)い絞(じ)めにされてしまい防御不能状態に陥った。そこに、正面から大介の容赦(ようしゃ)ない貫手(ぬきて)が胸板を貫(つらぬ)こうとして差し迫った。

「うぬりゃああぁぁぁーッ！！」

青筋を立て白目を剥いた正友が、背負い投げの要領で、羽交い絞めする広介の体を後ろから前へと受け流したので、大介の貫手が広介の背中に突き立ってしまった。

「ゴフッ…」

広介は吐血し、ぐったりとしてしまった。その瞬間、拘束(こうそく)が緩(ゆる)んだので、広介の腕を振り払った正友が、貫手が背中に喰いこみ、身動きの取れない大介に猛攻(もうこう)を加えた。それは屈強(くっきょう)な筋肉に喰いこんだ貫手が剥(は)がれるほどの連打となって、大介を吹き飛ばした。

「うぬぐぅ…わ、我ぇ敵…た・お‥す…」

「ハーハーハー…」

大介はかなりのダメージを負い、這(は)い蹲(つくば)っていた。ひとまず危機は脱したが、目の前にはまだ無傷の八野がいるし、大介も完全に倒れてはいない。それに対し、正友はかなり体力を消耗しているようであった。だが、八野は正友と戦う姿勢を見せず、息を荒げる正友をじっと観察している

「ハァハァ…な、何をじっと見てるんだ…かかって来いよ…い、今がオレを倒すチャンスだぜ？…。」
息切れする正友の耳に電子音が聞こえた。
「50000？…」
八野の眼鏡に、数字がデジタル表示で浮かび上がった。正友から見て反対の表記だったので、確認するかのように、彼は思わず声を出してその数字を読みあげていた。
「なかなかの戦投力をお持ちのようですね。」
「何を計ってんだテメェ…」
「貴殿(きでん)らの間で言うところの内力(メキド)ですよ。」
「ほーう。…そんなの計ってどうすんだよ。」
「そんな事よりも、ご自分の戦いに集中した方がよいのでは？」
「何ッ!?」
立ち上がった大介が全身の毛穴から煙を沸かしている。皮膚は鋼鉄のようなダークグレーの色となり、もはや人外(じんがい)の生物と化し、増々、パワーアップしたようであった。
「お～ビューティホーッ。貴殿の攻撃のお陰で、この者はさらに進化しましたよ。」
「これは！？何だってんだ一体…。」
正友の戸惑いを余所(よそ)に、更に力を増した大介が大地を蹴りあげ猛突進してきた。スタート時の爆発的キック力は、土埃(つちぼこり)を激しく撒(ま)き上げた。
「風奏(ふうそう)　神楽竜姫(かぐらりゅうき)！！」
激しい技の応酬(おうしゅう)を予想し、正友が内力で編みだしたスピリットアームズ【神統武具】。しかし、大介の攻撃を防ごうとすると、直前で神楽竜姫が消滅してしまった。
「何ィッ！？ぐほぁッ…!!」
想定外の出来事に正面がガラ空きとなった正友。胸を正拳で強打され、血を吐きながら苦痛に顔を歪(ゆが)めた。

「ゲーハモテーヌは外に現した内力を吸収するので、スピリットアームズは通用しませんよ…遅かったか。」
容赦(ようしゃ)ない剛拳を正友に見舞おうとする大介。胸への一撃がハートブレイクショットのようになってしまい、かろうじて意識はあるのだが、正友は身動きが取れないでいた。
「そこまでだ！！」
どこからともなく声がしたかと思うと、正友にトドメを刺そうとしていた大介が、あべこべに一瞬にして薙(な)ぎ倒されていた。
「う…秀さん…!?」
「油断したな正友。ちょっと今のは危ないタイミングだったぞ。」
正友が元に戻ったので、秀樹は彼を抱えた状態から地に降ろした。
「秀さん…遅ぇーよ。」
「スマン。仕事が長引いてな…」
「こんな時に仕事しないでくれよ。」
「まぁそう言うな。」
不敵な笑みを八野が浮かべ、秀樹達の話しに割って入ってきた。
「今の早業、仲々の物でしたな。」
「アンタが八野さんか？」
「えぇ、お見知りおきを…。ところで、今しがた貴殿の戦投力が、一瞬で９万近くまで膨れ上がったのですが。ソコに転がっている下僕(げぼく)を倒すや否や、１割以下に落ちましたね。」
「…それがどうかしたか？」
「フフフ。その内力の扱い方…相当な手練(てだ)れのようですな。しかし、ここにいる下僕がさらに強くなるとすれば、どうしますかな？」
「何ッ!?」
大介がまたまた立ち上がり。それに共鳴(きょうめい)するかのように、広介も力を盛り返し再び牙を剥いた。

「今度はタッグ戦と行きましょう。」
八野の笑みが、より一層に不敵さを増した。
「アイツ、絶対ブッ飛ばすッ！！それより秀さん、コイツらにはスピリットアームズが利かないから気をつけてな。」
「あぁ…分かってる。」
内に秘める自らの力を外気功に変換し、それを触媒(しょくばい)として作りだす、それがスピリットアームズ【神統武具】と言われる、神代の昔より選ばれた者のみが持つ事を許される武器であるが。
それがゲーハモテーヌには通じないのを、なぜ秀樹は知っているのだろうか。秀樹の返答に釈然(しゃくぜん)としない正友であったが、迫りくる大介と広介を前に、戦いに集中しなければならないでいた。比較的細身の正友と、中肉中背の秀樹とからすれば、大型トラックと原付ほどの体格差がある大介と広介であるが、その力強い拳も蹴りも、秀樹達にカスリ傷一つすら与えられない。
鋼(はがね)のように逞(たくま)しくぶ厚い筋肉は、決して愚鈍(ぐどん)な動きではなく、その力が及ぼす攻撃範囲はかなりの広域であり、拳圧を見切るだけにも苦労しそうなほどである。極度に筋肉が大きい分、力が強いがゆえに、仮に動きが鈍いとしても、距離を保ちさえすれば拳圧がそのハンデをカバーしてくれるという理屈になるが、大介と広介は動きもかなり迅(はや)い。
しかしながら攻撃が決まらない理由は簡単な物であった。秀樹と正友の動きの方がもっと迅く、かつ技の見切りもしっかりとしていたからである。
「躱してばかりでは永遠にこの物達は倒せませんよ。」
ニヤケながら八野がそう言った。
「どうする？秀さん。」
攻撃をかわす合間を縫い、正友が問いかけた。

「任せとけッ。」
そう言って、秀樹は広介の攻撃を避け、十数歩先まで後退すると、広介と正面から対峙(たいじ)した。その姿を確認した広介が、真っ向から突進してくると、秀樹は右足を半歩後方へずらし、少し斜めに向きあう形をとると。圧倒的力を集約した、広介の渾身の右ストレートが目前に迫っていた。インパクトの瞬間、秀樹は左手を差し伸べるかのようにし、素早くも軽いタッチで広介のストレートを受け止めると、広介の体が硬直したようになった。
人間であれ動物であれ、標的を補足して攻撃を加える時には、標的の存在する場所に向かって攻撃をする。広介の攻撃も例外ではなく、身動きしないで立っている秀樹に向かって全力の右拳を放った筈であった。しかし、それは考え方を変えれば、秀樹の居る“場所”に向かって全力で殴りかかったとも言える。その理屈の盲点(もうてん)を秀樹は突いていた。
秀樹はギリギリまでストレートの来る場所に止まる事で、全力の一撃をその場所に呼び込み、インパクトの寸前で、広介の拳を押し返すようにして難を逃れたのである。
物理的法則でそれを解説するなら、秀樹に向かって放たれたものの空振りした一撃は、秀樹がいると錯覚(さっかく)した場所で、強大なエネルギーを振るった時点で、拡散・静止してしまい、その力を失う。その終点に近い所で自分の重心をかけた左手で広介の拳を受け止めると、慣性の法則で後ろへ飛ばされるのだが、すぐにその慣性は終点でゼロになってしまったので、止まったように見えたのである。
第三者からその状態を見れば、秀樹が軽々と広介の剛拳を受け止めたように思わせたのである。理屈では簡単に説明できるのだが、実際にはかなりの高度な戦術眼と度胸を要し、実行するとなれば容易(よういい)に出来る事ではなかった。
「ウガッ！？」
右ストレートを空振りし、広介の体は伸び切ったうえに、一瞬ではあるが硬直していて、秀樹の繰り出す技を防ぐのにガードが間に合わず、悔しがるように声を漏らした。

「香魚拳奥義(こうぎょけんおうぎ)　渦竜天棲旋(がりょうてんせいせん)!!」
「ウゴォォオオアアァァァーー…!!」
巧みな発勁(はっけい)を駆使し、筋肉の連動性をフル稼働させた秀樹のアッパーカットが広介の腹に命中した。その発勁による、殴打(おうだ)の螺旋(らせん)運動(うんどう)を描く様は、秀樹の呼んだ奥義の名を象徴しているようで。正しく海底に潜む竜がその住処(すみか)を守るため、外敵を威嚇(いかく)するかのようにたむろする渦潮を、逆立て天へと昇らせているかのような光景であった。
「秀さん、スゲェ～ッ!!」
「バカッ。関心してないでお前もやれッ!!」
そうは言われても、正友は秀樹の奥義をチラッとは見たが、静視する暇は大介が与えてくれていない。そればかりか大介の貫手は、正友も敬意と畏怖(いふ)の念を抱くほど、その威力と迅さには定評があったが、外部から何者かが力を与え、その威力が格段に増して手のつけられない状態にあった。
しかし、逃げ回っていてはラチが開かないと正友は接近戦を試みたが―そうなると、なりふりかまわず貫手を連打し、反撃はおろか躱すのも厳しくなっているようであった。
「う、うわっ…っと!?」
これはたまらんといった感じで退避した正友だが、大介に向きあったまま後ろに下がるのは至難の技で、バランスを崩してしまった。その隙を大介が見逃す筈はなく、正友を粉砕せんが如き強烈な正拳が放たれた。とっさにガードを固めた正友だが、ガードした腕に大介の拳が当たると、あっという間に数十メートル先へと吹き飛んでしまった。
「あれが決まってしまっては、お連れさんはひとたまりもありませんね。」
八野がそう言い、サディスティックな笑みを見せた。
「何、早とちりしてるんだ？」
「何ッ!?」
「お前の下僕とやらの心配をしろって事だ。」
勝ち誇っていた八野の表情が秀樹の発した言葉に引きつった。どう見ても正友は大介の剛拳に吹き飛ばされ、重傷を負ったとしか思えない状況下にある中。八野は目を凝らしたが、その先は土煙に覆われていて、近づかない事には確認が取れない。

「ウゴオォアアァァーーッ!!」
土煙の先に、立ち上がろうとする正友の姿を捉(とら)えた大介が、トドメを刺そうとしてソコに猛突進して行ったのだが…
「ウゴオォッ…!?」
正友の影に向かってく大介が、その影に接近する前に、全く違う角度からの攻撃を受けて、足が止まってしまった。
ピピッ…
秀樹達には見えてなかったが、八野の身に付ける戦投力の測定器がイチ早く正友の健在を察知し、電子音を発してそれを伝えていた。
「ば、馬鹿な…」
測定器の示す先を見た八野。土煙が止み、肉眼で正友と大介の姿を確認したのだが、信じられないと言った面持(おもも)ちであった。というのは、正友が無傷であったからで、しかも優勢であったかに映っていた大介が苦しそうにしているのが理解できなかったからである。
実は正友は、秀樹が広介の攻撃を防いだのと同じ要領で、ワザとよろけて大介の攻撃を誘い出し、正拳の威力を殺した後で、自ら後方に飛び、あたかも大介の攻撃で吹き飛ばされたかのようなシーンを演出していたのである。
そして、自らが巻き起こした土煙で視界を攪乱(かくらん)させると、素早く近くにあったお地蔵さんに自分の上着を被せる、空蝉(うつせみ)の術を用いて勘違いを誘い、ソコを目指して飛び込む大介に予期せぬ所からの打撃を浴びせていた。
秀樹は、正友がワザと攻撃を喰らったのを知っていたので、見えてなくとも自信を持って八野に反論したのである。
「龍球奥義(りゅうきゅうおうぎ)　応龍破(おうりゅうは)！！」
「うごぉぉおおああぁぁーー…!!」
大介の動きが止まったのは、ほんの僅かな時間であったが、正友が奥義を繰り出すには充分な時間であった。秀樹がした攻撃と同じ動きで全身の筋肉の連動を駆使した発勁(はっけい)。それを鳩尾(みぞおち)に叩き込むと、大介の巨体が吹き飛んだ。

「今度はお前の番だな。」
「さて、どちらが相手をしてくれるのですかな？」
「随分と余裕のようだが。倒された後じゃ、訊きたい事も満足に訊けないだろうから、今、話をしてくれないか？」
「何ィッ！？貴様、殺されたいらしいな！」
「そりゃ違うだろ。」
大介を倒した正友が八野と秀樹の会話に入ってきた。
「どの道、オレらを殺す自信があるんなら、オレ達の訊きたい事に先に応えても差しつかえないじゃんよ。なぁ秀さん！ソレが言いたいんだろ？」
「まぁそんなトコだな。」
「八野さんよぉ。これぐらいで苛立(いらだ)ってると、器(うつわ)の小っさい奴だと思われるぜ。なぁ、オレ達の質問に答えてくれよ？」
「くッ…まぁいい。何が訊きたいんだ？」
器の底が知れてると思われるのが、どうにも我慢(がまん)ならないようで、八野は怒りを抑えながら話を聞く態度を見せた。
「ゲーハモテーヌとは何だ？」
秀樹は単刀直入(たんとうちょくにゅう)に質問をした。
「ゲーハモテーヌ。それは悪意が起こす奇跡。心の闇が極限に達した者にのみ許される人間を超えた力だ。」
「人間を超えた能力とは具体的に言うと、どんな仕組みだ？」
「悪意によって脳のリミッターを外し、筋力を最大限に用いるようになれる。これが第一段階だ。」
「第一段階？…どういう意味だ？」
「悪意の高まり次第で我々はいくらでも進化できる。貴様等の内力(メキド)のような物、そういう事だ。」
「ほう、興味深い話だな。ならもう一つ。そこに転がってる二人を、下僕(げぼく)のように使役(しえき)してるのは外部からの力か？」
「そうだ。我等が偉大なる神、パーピリオン様の力よ。」
「お前の下している命令に従うように、パーピリオンは二人を操っている。そういう事か？」
「いかにも。」

「お前も操られているのか？」
「違うな。私はパーピリオン様のお力に敬服(けいふく)し、自ら従っているのだ。」
「そうか。という事は、そこの二人は無理矢理に従わされているという事だな。」
「フッ。貴様、頭が切れるな。貴様を倒したあかつきには、パーピリオン様の忠実なる下僕として洗脳するとしようか。」
「お前は望んでゲーハモテーヌとなり、他の二人は強引にならされた。その首謀者(しゅぼうしゃ)がパーピリオン…そうか！？」
「訊きたい事はそれだけか？」
「いや、まだだ。パーピリオンは、確か凄まじい科学力を持っているとか言う噂を耳にしたが、その科学力でお前らを操ってるのか？」
「そうだ。それがどうした。」
「ゲーハモテーヌのオリジナルはドコにいる？」
「何ッ!?貴様、何故それを…？」
秀樹の鋭い洞察力(どうさつりょく)に、八野は、相当、驚いた様子であった。「人間を超えた存在」と、ゲーハモテーヌを評し、パーピリオンを神と崇(あが)めると喋っていた八野。
それに先進の科学を用いて人間に力を与えるという手段から推測されるのは、ある人間から注出された突然変異の要素を、他の人間に伝染させているという仮説。秀樹は、一瞬にしてそんな仮説を組み立て、内情を知っている八野に対し、結論を完潔に言ってのけた上で問いかけたのである。その頭の回転の早さは、八野の想像の域を超えた物であった。
「お前は、自ら望んでゲーハモテーヌになったと言ったな？少なくともお前はオリジナルじゃないってコトだな。」
戸惑う八野を精神的に追い込むかのように、丁寧な説明を秀樹は加え、ゲーハモテーヌのオリジナルの所在について再度尋ねた。
「貴様は危険分子だな。下僕にするのはヤメにして殺すとしよう。」
「その前に今の質問に答えてくれよ。いつでも殺れる自信があるんだろ？」
「くッ…まぁいい。答えてやる…」

ゲーハモテーヌの種の起源は、とある外国の神父にその起源があった。神に仕える聖職者。その立場とは全く正反対の感情が起こる事件をひきおこしたのが始まり。

彼に芽生えた負の感情は、善行と悪行の間を行ったり来たりしている、俗世間(ぞくせけん)の人間が陥る心の闇とは異質な物であった。一言で言うなら“落差”。彼は並みいる聖職者の中でも、とりわけ勤勉で真面目な存在であった。

そんな彼が、どんな事件を引き起こしたのかというと、女性問題であった。敬虔(けいけん)なカトリックの神父として、結婚もせず、マリア様を崇拝(すうはい)していた彼が、『マリー』という名のキャバ嬢に片思いをし、凶悪な犯行に及んだのは、皮肉としか言いようがない。

犯行の一部始終は言明を避けるが、彼が陥った憎悪(ぞうお)の世界は、汚れなき心を一気に蝕(むしば)み、ショック死する程の精神的ダメージを彼自身に与えた。死の淵(ふち)を彷徨(さまよ)い、生還した後、彼は正しく進化を果したのである。人並み外れた清らかさから、常人の悪意を超える悪意を持った人間が生まれた瞬間であった。

その悪意に反応し変異した細胞は、負の感情をエネルギー源とし、そのエネルギーをまるで筋肉増強剤のように造り換え、身体能力を飛躍的(ひやくてき)に向上させたのだと言う。

しかし、そんな超人的な力を手にした彼は、力を得る代償として人間の持つ一切の感情を失くし、ただ憎しみと、憎しみから生まれる破壊衝動に従って、殺戮(さつりく)を繰り返すだけの怪人と自らをならしめていた。そんな彼に目をつけたパーピリオン星人が、彼の持つ特異なDNAを解析し、人工的にゲーハモテーヌを造れるようにしたのだと言う。

「なるほどな。厳密(げんみつ)に言うなら、お前は量産型のゲーハモテーヌって訳だな！」

「それがどうかしたか？」

「オリジナルとの差異はどれ位だ？」

「差異だと！？」

「オリジナルと比べてお前達は遜色(そんしょく)ないかってコトさ。人間は機械と違って構造が複雑だからな。まさか丸っきりオリジナルを複製できるとは、いかに先進の科学力を持ってるとは言っても、不可能なんじゃないかと思ってな。」

「うぬぅ～…貴様はやはり危険分子だ…。その通りだ！ゲーハモテーヌへの細胞変異は臓器移植のような物で、拒絶反応や、同化したとしてもシンクロ率には個人差がある。」
「…だろうな。」
「さぁ、質問はもういいだろう。始めようではないか。」
「待て！」
「何だ、まだあるのか？まさか命のやりとりに怖気づいたのではあるまいな?」
「…冗談はよせよ。ただ、お前の相手は別の者がする。それまで待て！」
「何を～ッ！貴様を殺してから、ソイツも殺してやるわッ!!」
「だからソイツを倒してから、俺をヤレよ。どっちみちお前に勝つ自信があるなら、どっちが後先になっても一緒だろ？」
「貴様ぁ～ッ…どれだけ儂(わし)を侮辱(ぶじょく)する気だぁ～ッ!!」
八野の言葉使いが、だんだんと怒りで荒くなってきた。その時―
「お兄ちゃん、遅れちゃってゴメン！」
「遅いじゃないか、はるか。」
「まさか…この小娘が儂の相手ではあるまいな？」
「いや、この娘がそうだ。」
「どこまでもナメおってぇ～ッ…!!」
「おい待てよ。この娘はまだ若いが俺達の中で一番強いんだぜ。その眼鏡で、“戦投力”とかいうのを計ってみろよ。」
秀樹の言葉に驚いた八野が半信半疑ではるかの力を測定すると。
「こんな小娘が…馬鹿な!?スカウター(戦投力測定器)の故障か！?」
「な、分かっただろ？」
「フン。どうやら貴様の話しは本当のようだな。先ずはその小娘の命から頂くとするか…」
はるかの戦投力に脅威(きょうい)を感じた八野。と同時に、八野の闘争心に火が点いたのか、彼は血が騒いでいるかのようなギラギラした目つきをした。

「はるか。お前は実戦経験が少ない。だが、お前はこれからもっと強い奴らと戦わなきゃイケないんだ。アイツは練習にはもってこいの相手だ。俺や、師匠の教えた体術の基本を確認しながら戦え。いいな！」
秀樹が小さな声でそうはるかに耳うちをした。
「うん、分かったわ。」
「俺はちょっと後ろに下がらせてもらう。それが戦いの合図だ。」
秀樹が八野に向かって語りかけた。
「あぁ分かった。」
「はるか頑張れよ。」
「うん。」
「おい、小娘。」
「何よッ。」
「今、命乞(いのちご)いをするなら命だけは助けてやる。その代わり儂の女になれッ。」
「何、キモいコト言ってんのよッ！」
「黙れッ！！」
怒った八野が少し離れた位置から正拳を振うと、拳圧が突風を巻き起こし、はるかの横側を通り過ぎ、その先にある樹木に当たると打ち砕いていた。
「フハハハハッ。どうだ！この威力。儂を今までの奴と一緒にするなよ。ゲーハモテーヌのオリジナルとほぼ同格の力。偉大なるパーピリオン様に授かったこの力で、儂はマウンテンゴリラよりも数十倍も強靭(きょうじん)な筋力を手に入れたのだ。さぁ、これでも命乞いをせんかッ！」
「ソレって要はただのゴリラなんじゃないの？」
失笑気味(しっしょうぎみ)にそう言ったはるか。八野の怒りは頂点に達した。
「ほざけぇーッ！！」
八野は大きな事を言うだけあって、はるかに襲いかかるスピードは大介や広介の比ではなかった。
「死ねッ！！」
はるかの目前で、八野の筋力は更に増し。大介と広介よりもまだ一回り大きな体格になると、強烈な拳の一撃がはるかに見舞われた。

「促え…っ！？」
インパクトの瞬間。勝利を確信した八野が歓喜(かんき)の声を上げようとしたのだが、その言葉は最後まで言えずして途絶えてしまった。
「ぼべばッ？？？…」
尻切(しりき)れ蜻蛉(とんぼ)となった歓喜の語調は、一瞬にして血ヘドを吐く悶絶(もんぜつ)の始まりへと変わってしまっていた。苦しみに悶える八野の目は、「何故？」という戸惑いの感情を現している。確かに八野の拳は、はるかに当っていた。
しかし、はるかも又、秀樹と正友がして見せた身のこなしで、八野の攻撃を無効化し。そうとは知らず八野が油断した所を、突き放った腕の更に外側から、はるかは被せるように蹴りを放っていたのである。
いかに強靭な筋肉を持とうとも、死角からの攻撃には脆(もろ)い物で、見えて予測さえできていたなら何でもない攻撃であったが、予期せぬ部位への打撃は、弛(ゆる)みきった筋肉の壁を押し込み、急所を促えていた。
はるかの蹴りは八野の顎(あご)を砕き、脳震盪(のうしんとう)を起こした八野はやがて膝から崩れてしまっていた。
「がはッ…何が…？」
「何が起こったんだ？」と言いたかった八野だが、脳が揺さぶられているので呂律(ろれつ)が回らない。言いたい事を察したはるかが、話しだした。
「いいわ、答えてあげる。あなたの拳は確かに私に当たったわ。でも、あなたが想像しているような当たり方じゃない。あなたの拳の皮膚が少しだけ私の指先に触れただけよ。」
「な、何ッ!?…ゴフォッ…」
顎が砕けた為に、喋ろうとすると口に溜まった血が気管に入り、むせる八野。あまりにも瞬間的な出来事に、まだ事態を呑み込めていない様子であった。
「さぁ、行くわよッ。」
そんな事情は関係ないといった感じで、はるかの大攻勢が始まった。膝をつき、うずくまる八野の顔を思いきり蹴り上げ、八野の体が空高く舞い上がると、はるかもジャンプして掌底(しょうてい)を浴びせ、そのまま地表へ叩きつけた。

「お兄ちゃん、これでいいの？」
仰向けになり気絶している様子の八野を傍らに、はるかが秀樹のいる方を見てそう言った。勝利を確信して引き揚げようとしたはるかだが、殺気を感じ振り返ると、ドス黒いオーラが八野の体を取り巻き、意識を取り戻したかと思うと、見る間に元気になり、立ち上がった。
「何コレ!?」
「これがゲーハモテーヌの超回復力だ。」
人間のレベルを大幅に超えた回復力。一体どうすれば倒せるのか。未知数の力を持つ八野に、はるかは言い知れぬ不安感を抱いた。
「ぬおりゃあぁぁーーッ!!」
八野が気合いを込めると、体中から凄まじい内力が溢れていて、大地を振わせた。その勢いで突っ込んでくると、スピードが更に増していた。
「迅いッ!?」
さきほどまでとは段違いの瞬発力に、一瞬、見入ってしまったはるか。一気に八野が距離を詰め、攻撃の射程(しゃてい)圏内(けんない)にはるかを追いこみ、猛烈な連打を浴びせた。
「ガハハハァーッ。どうだ!!手も足も出まい。憎悪は無限に儂に力を与える。貧弱な人間など恐るるに足りぬわッ!!」
と、イキがっていた八野だが。次第にはるかを追い詰め、今度こそはその細身を促えたと思ったのに、まるで柳(やなぎ)の枝でも殴っているかのように、触れた途端に力を逃がされ、手応えを感じない。しばらく、それを繰り返したが、やがて八野が疲労の色をその動きに見せ始めた。
「ゲフッ…べぎぶぁーッ…！！」
疲労の為に粗(あら)くなった攻撃。その芽を摘みとるかのように、コンパクトな振りではるかのパンチと蹴りの二段攻撃が入り、八野を吹き飛ばしていた。
「ゴフッ…まさか…あの戦投力はスカウターの故障ではなかったのか!?…。」
「何、一人でブツブツ言ってんのか分からないけど、もう降参しなさいよッ。」
「誰が降参なんぞするかぁぁああーーッ!!」
再度、はるかへと突進しようとした八野の前に、秀樹が立ちはだかった。

「もう止めろ！お前の負けだ…。」
立ち止まっていた八野が、怒りに任せ大振りなフックを放ったが、秀樹に軽々と躱されてしまった。
「ゲフッ…!?」
「スルリ」と滑(なめ)らかに躱し、委(ゆだ)ねるような身のこなしで懐(ふところ)に近づくと、そっと掌底を放つと、八野がとても苦しそうにした。
「これが暗勁(あんけい)。距離のない所からダメージを与える発勁だ。」
「うぐ…ぬがぁぁああーーッ！！」
なおも力まかせに拳を振おうとする八野。しかし、暖簾(のれん)に腕押(うでお)しといった様子で、秀樹は攻撃を全く寄せつけない。その動きは、今しがたはるかの見せた動きその物であった。
「これが化勁(かけい)。敵の攻撃を無効にする動きだ。」
躱しながら八野を悟(さと)すように話す秀樹。
「そして、これが人体の内部からの破壊を目的とする、内攻勁(ないこうけい)だ。」
「ぐおッ！？ぶぎゃーーーッ…!!」
カウンターで蹴りを入れて動きを止めると、ガラ空きの鳩尾(みぞおち)に両手で掌底を放ち、八野を俯(うつむ)せに倒れさせた。
「うぐぉぉ…!!」
「生物の体は７割方水でできている。それに衝撃を加え、生体機能を停止させた。ゲーハかハーゲか知らんが、新しい生物になったとしても、その力に溺れては何の意味もない。人間は猿人から進化してより何万年もの間、代々、知恵を磨き己を高めてきた。それが勁だ！お前は人類の叡智(えいち)の前に敗れたんだ。」
「ふぐおぉぉ…ぁぁ…。」
八野は秀樹の言葉に敗北感に打ちひしがれながら気を失った。

「お兄ちゃん。」
「秀さん！」
正友とはるかが秀樹の元へ駆け寄ってきた。
「秀さん、今の技スゲェな。」
「馬鹿、お前も習ってんだぞ！ちゃんと修業したのか？」
「へへへ、よく覚えてないんだなコレが…」
「…しょうがないな。今度教えてやるから、ちゃんとやれよ！」
「…はいよ。それとちょっと気になったんだけどさ、秀さんが大ちゃんさんと戦った時なんだけど、オレがアドバイスしようとしてた時にさ、何か相手の技とか説明してくんなくても大丈夫みたいな感じだったのは何なん？」
「…お前な。聴勁(ちょうけい)だよ、聴勁！！ちゃんと師匠の話とか聞いてんのか？」
「あぁ…あの…何だったけ？」
「ったく…。相手の能力を察知する勁だよ。」
「そんな勁があるの？」
「はるかはまだ教わってなかったな。そういう技があるんだ。今度の敵は、得体がしれないからソイツらとの戦いまでには教えとかないとな。正友みたいに修業をサボっちゃダメだぞ！」
「はい。」
「秀さーん、そりゃないよぉ…。オレはサボってたんじゃなくて、話を聞いてなかっただけなんだよー。」
「同じコトでしょ。ちゃんと反省しなさいよ！」
「なんでお前がそんな事、言うんだよッ。」
「足引っ張んないように、ちゃんとやんなさいって言ってんのよッ。」
「なんだよーッ。おまっ、お前遅刻しといて、何さその言い方ぁー。お前こそ何やってたんだよッ？」
「うるさいわねー。アンタがお兄ちゃんみたいにちゃんと修業してれば、あんな人達なんかパッパッと片付けられて何の問題もなかったのよッ！」
「何ィーッ!!」
「もうヤメろッ!」
耳元で怒鳴りあう二人に愛想を尽かした秀樹が、怒り気味にそう言った。二人は押し黙り睨み合っていたのだが、急に正友が視線を沿らし空を見上げた。

「秀さん…アレ!」
「ん？何だ…あっ!?」
秀樹が空を見上げると夜空に４つの光体が現れていた。
「～～～～～、～～～～～・・・」
「はぁ？何て言ってんだ？」
正友はそう言って首をかしげた。
「聴勁（心）で聞くんだ。」
遠い空から投げかけている言葉は、その遠さゆえに意味が聞きとれないのかと思い込んでいた正友だが、秀樹の一言に、耳を澄ますようにして心を集中させた。
「お前ら気に入ったぞ。」
目を閉じると、遠くの上空にいるはずの光体が、その姿を明確にし、４つある光体の内の１つから人影が現れた。人間とは明らかに異なる容姿は、緑色の肌をし、まるでピ〇コロ大魔王っぽい感じを受ける。印象的には男みたいだが、異世界の存在に、果して人間的な区別があるのかどうか定かではない。
好意的な言動の中にも、上から目線の発音が滲(にじ)んでいて、自信に満ち溢れている様は少なからず秀樹達を動揺させていた。
「一体、俺達に何の用だ。」
努めて冷静を装う秀樹が、心の中に現れた正体不明の存在に対し、そう呟いた。
「お前達は晴れて我らに認められたのだ。光栄に思うがよい！」
「お前らがパーピリオン星人か？」
「いかにも。我らは、我らと対戦する相手を求めておる。分かるな、この意味が。」
「あぁ…どうせ今までの一部始終を観てたんだろ？先進の科学とやらでな。」
「その通りだ。手短に言わせて貰おう。十日やる、それまでに準備して我らと戦え！よいな！」
「どこで戦るんだ？」
「月まで来るがよい。」
「どうせ逃げられないようにしてるんだろうが、嫌だと言ったら？」

「この地球に巨大な隕石が落ちる事になる。」
「なるほどな…分かった。一つ教えてくれ、お前達が戦う理由は何だ？」
「お前の考えておる通りだ。」
心を見透かされた事に、秀樹は背すじを凍らせる思いであった。
「フッ…俺達は、アンタ等の闘争本能を駆り立てる相手として選ばれたってワケだ。アンタ等の申し出は拒めないようだし、受けて立とう。アンタの名を教えてくれないか？」
「我はジャキ。」
「アンタがリーダーなのか？」
「我らが主はポモプン様。偉大なるパーピリオン様直系のご後胤(こういん)よ。」
「あとの二人の名は？」
「月まで這い上がってこい！さすればおのずと分かるであろう…。」
「あっ!?待て…」
そう言い残し、パーピリオン星人達は秀樹達の意識から消えた。我に返った三人が夜空を見上げると、そこにはすでに何もなかった。
「くっ…もう少し話を引き延ばしたかったんだがな…。」
「しょうがないよ、お兄ちゃん。だってあの人達、心の中が読めるみたいなんだから。」
「そうだよ。秀さんは悪くないよ。後は鮎吉師匠に話をしてみようぜ！」
「あぁ…そうだな。ひとまず今夜はもう遅いから休むとしよう。」

# バトルボーラーはるか
# 第二集
# 星間戦争

## 第二章・知恵比べ

http://p.booklog.jp/book/58893

著者 **:** Ψ　**(Eternity Flame)**英　樹**(**はなぶさ　いつき**)**
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile
ブログhttp://profile.ameba.jp/jjmmd123/

編集：Ψ　(Eternity Flame)　秋乃空（あきのそら）
ブログhttp://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします
http://p.booklog.jp/book/58893

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/58893

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ